

キヤザー「ネブラスカ作品」再読

榊原威征

1. はじめに

今から三五年前の夏に、私はミネソタ州の州都セントポール市を訪れたことがある。

セントポールは、当時私が研究テーマとしていたフランシス・スコット・フィッツジェラルド (Francis Scott Fitzgerald, 1896-1940) が生まれ育った町で、そこに生家があったことから一度見ておきたいと思ったことが訪問の理由であった。

その当時、私はオクラホマ・シティに居住していた。勿論、飛行機代を払うだけの経済的な余裕はなかったので、車を駆ってのロングドライブとならざるを得なかった。オクラホマ・シティからミネソタ州へは真っ直ぐに北上してカンザス州とネブラスカ

州を南から北へと縦断し、サウス・ダコタ州の一部を横切ってミネソタ州に入るのがベストの道程であった。

折角ネブラスカ州を通るのだから、時間を取ってあちらこちらを見て廻りたい、という思いが心の一部に宿っていた。というのは、ネブラスカがウィラ・キヤザー (Willie Cahner, 1873-1947) の作品の舞台となった場所だったからである。キヤザーといえは、その文学上の功績に対してネブラスカ大学、ミシガン大学、キャリフォルニア大学、プリンストン大学など数大学から名誉博士号を贈られ、一九二二年に出版した『われらの仲間』(One of Ours) では女性初のピューリッツァー賞受賞者となり、カナダのケベック地方を舞台として物した一

九三一年の『岩の上の影』(Shadows on the Rock) では、フランスよりアメリカ女流文学賞を与えられ、晩年には生涯に亘る文学の業績が評価されて、アメリカ芸術院よりゴールド・メダルが授与されているとおり、確実にアメリカ文学史の一角を占める作家である。キヤザーはフィッツジェラルドよりも二三歳年長なのだが、彼女が長命ではあったが作家デビューが遅かったことと、フィッツジェラルドは短命ではあったがデビューが早かったことから、二人はほぼ同時期に作家活動をしており、フィッツジェラルドの代表作『華麗なるギャツビー』(The Great Gatsby, 1925) は、キヤザーの『私のアントニア』(My Antonia, 1918) からヒントを得て書かれた、というのが通説であ

る。そのような二人の関係を知れば、是非ともネブラスカを見てみたいと思うのは当然であろう。しかしながら、時間的な制約からその思いは果たせなかった。

ネブラスカは典型的な農業州である。アメリカ東部から移住した人々と、旧世界から入植した入植民たちによって開拓されたと言われる。地理的には大陸のほぼ中央に位置し、グレートプレーンと呼ばれる大平原の一部をなし、とうもろこしと小麦を生産してグリーンベルトと呼ばれるアメリカの穀倉地帯の一翼を担っている。

中古のフォード・ルマンを駆ってそのネブラスカ州に入ると、地平線の果てまで一面緑のコーン・フィールドと小麦畑が連続と続き、地平線の上にはどこまでも青い大きな空が広がっていた。そして、そのコーンフィールドと小麦畑を切り裂くかのようにフリーウェイが真っ直ぐに延びていた。私はその平坦なフリーウェイを、セントポールを目指し只管アクセルを踏み続けたものであった。

あれから三五年、たまたま本棚に並んでいた『私のアントニア』を手にとって再読した私に、三五年前のネブラスカの光景が突然蘇った。あのコーンフィールドは、あの小麦畑は、今も当時の儘なのだろうか？ 昼食の為に立ち寄ったあのコーヒーショップは今どうなっているだろう？ そう思うと、三五年振りにネブラスカへ行ってみたくなった。

行くとなれば、最初の訪問地は当然のことながらレッド・クラウドの町ということになる。レッド・クラウドはキャザーが住んだ町で、彼女の「ネブラスカもの」と呼ばれる五つの小説と数多い短編の舞台となった場所である。現在ここにはウィラ・キャザー・パイオニア記念館が建設されており、彼女に関する古い書物から新しい書物まで、更には彼女に言及のある雑誌まであらゆる資料が揃えられているという。出来ることなら、単行本として出版されたものとしては最も古いキャザー研究、ルネ・ラパン著『ウィラ・キャザー』(Willia Cather,

1930)にお目に掛かりたいものである。キャザーの存命中に出されたまさに稀覯本だからだ。

レッド・クラウドにはまた、キャザーランド(Catherland)と題されるツアーが存在するらしい。「ネブラスカもの」と呼ばれる五つの作品の中でキャザーが描いたあれこれの場所を、文字通りツアーのように廻るもので、ほぼ五〇マイル(八〇キロメートル)を約三時間でカバーするという。これにもぜひ参加したいものである。

レッド・クラウドの次に訪れるとすれば、それはオマハ図書館であろう。ここにはキャザーの肖像画が飾られており、是非その肖像画も見ておかなければならない。これは、一九二三年に彼女がパリに旅行した際、図書館からの求めに応じて、当時肖像画家として名を馳せていたレオン・バクストに依頼して描いて貰ったものである。残念なことに、彼女はその出来栄にいたく失望したと言われているが、一見の価値はあるであろう。

扱、行くど決めたからには早いし越したことはない。できれば来夏には実行したいと思うのだが、空身で行くわけにはいかず、それなりの準備が必要であることは言うまでもない。本稿は、キャザーの作品のうち、特に「ネブラスカもの」と呼ばれる五作品を中心にキャザーについての情報を「研究ノート」の形で纏めたものである。

2. 生い立ちから作家誕生まで

キャザーの描いた四作目の小説『私のアントニア』には、作中人物でありながら、一人称で語り手を務めるジム・バーデンが登場する。作中で語られるジムの青年期がほぼキャザーの伝記を踏襲しているの、ここでは詳細に立ち入ることはせず、ごく簡単に作家として立つまでの彼女の軌跡を振り返ってみる。

キャザーは一八七三年にヴァージニアで生まれた。(キャザー研究のすべての参考書には一八七三年生まれと明記されている

のだが、キャザー自身は頑固にも一八七六年生まれを主張し、墓石にも1876-1947と印されている。) ジムがそうであったように、彼女はヴァージニアで九歳まで育てられ、その後一八八三年に家族でネブラスカへと移住した。そこには既に祖父母や叔父(父親の兄)夫婦が先に移住しており、一家はレッド・クラウドの近郊に居を構えた。そこは、スウェーデン、ドイツ、ボヘミア、デンマーク、スイスなどからの開拓者が住む小さなフロンティア・コミュニティで、後にキャザーとトンと呼ばれるようになり、ピューリッツァー賞を受けた五作目の小説『われらの仲間』の舞台として登場する。当時のキャザーは赤茶色の髪を短く刈り上げ、青い目をした利発そうなお転婆娘だったらしく、ジムがしたように、草原をあちこち歩き回るのを日課としていたようだ。

キャザーの目には、ネブラスカの人々ヴァージニアの人々とは大きく異なっていた。英語を理解出来ない人もたくさんいた。キャザーのしゃべり方は、ネブラスカ

の人々に比べるといかにもゆっくりだった。当然植生も違っていた。立木は殆どなく、レッド・クラウドの周りの地域は荒涼として、プレーリーグラスが丘を覆っていた。それに比べれば、ヴァージニアは天国だった。ネブラスカは風雨に晒される悪天候の場所であった。

キャザーは新しい環境に興味を持った。近隣の人々を訪れ、あちこちの店に行つてはお喋りをするようになった。彼女はまた、周りにある新しい植物や動物に興味を持ち始めた。以来、自然科学に対する興味が何年にも亘つて続き、毎日地域の動植物のありようを何時間も調べて過ごすようになっていった。(この時の知識が、後に『おお、開拓者よ!』(O Pioneers! 1913)や『私のアントニア』の中で生かされることになる。)この自然科学への興味は、大学二年の時に文学とジャーナリズムを専攻しようど決心するまで続いたという。移住後一年半が経過した頃父親は農業を諦め、金融・保険業を営むためレッド・クラウド

の町の中に引越しをすることとなった。

キャザーはここでハイスクールを終え、ネブラスカ大学へ進学する。レッド・クラウドでの生活は、勉学に関してはキャザーにとつて悪いものではなかった。ハイスクールの二人の先生が特にキャザーを気に入ってくれて特別勉強をしてくれたし、音楽の先生が彼女のクラシックやオペラに対する興味を引き出してくれたからである。また、近隣に住むドイツ人とフランス人がドイツ語とフランス語を教えてくれ、更にはホメロスやヴァージルについての知識さえ蓄えることができた。

ネブラスカ大学でキャザーは、当時、女性よりは男性の学問と考えられていた自然科学若しくは医学の分野へ進むことを考えていた。ところが、二年生の時のあるクラスで書いたカーライル (Thomas Carlyle, 1795-1881) についての論文が先生の目にとまり、それがネブラスカ・ステート・ジャーナル誌 (*Nebraska State Journal*) に載ることとなった。(このことが契機となって、

前述した如く、彼女は文学とジャーナリズムを専攻することを決心する。

一八九五年に大学を卒業すると、彼女はピッツバーグへ出て、ピッツバーグ・デイリー・リーダー (*Pittsburgh Daily Leader*) という新聞社の記者として五年を過ごす。その後、一九〇一年に高校のラテン語と英語の教師に転身する。記者生活は経済的な満足を与えてくれたもの、全く自由になる時間を確保できない生活だった。彼女には自由になる時間が必要だった。経済的事情よりも自由な時間を選択するあたりに、彼女の意志の強さ、別言すれば頑固さが窺われる。高校教師をしながら、キャザーは詩と短編を書きため、一九〇三年に最初の詩集『四月のたそがれ』 (*April Twilights*) を、そして一九〇五年には短編集『妖精の庭』 (*The Troll Garden*) を出版することができた。これが契機となり、当時ニューヨークで第一級の雑誌という定評を勝ち得ていたマクルアー誌 (*McClure's Magazine*) の社主サミュエル・マクルアー

氏 (Samuel S. McClure) からジョブオファーを受け、彼女はこれを容れて一〇年に亘ったピッツバーグでの生活を切り上げ、ニューヨークへ向かうこととなる。

キャザーのピッツバーグ生活の中で特筆すべきことは、一九〇一年のイザベル・マクラング (*Isabelle McClung*) との出会いである。リーダー誌の記者時代に知り合った女優を楽屋に訪ねた折、そこでピッツバーグの著名な裁判官マクラング氏 (*Judge McClung*) の令嬢イザベルと出会ったのである。二人はすぐに意気投合し、以来一九三八年にイザベルが死ぬまで、彼女はキャザーの良き友人、援助者、理解者であり続けたという。

マクルアー誌では最初は編集員として、後には編集長として合計六年間を勤めた。この間、イギリス、フランス、イタリア等々の国へ何度か出掛けて見聞を広めることができたが、何よりも特筆すべきは、一九〇八年のサラ・オーン・ジュエット (*Sarah Orne Jewett, 1849-1909*) との邂逅で

あった。ジュエットについては後述する。マクルアー誌で編集長として働いた後半には、彼女は長い休暇をとって自分の作品を書き始めている。一九一二年にマクルアー誌を辞めた時、それまで書き続けてきたものが作品となり、『アレグザンダーの橋』(Alexander's Bridge, 1912)のタイトルで出版された。以後キャザーは他の職業に就くことはなく、職業作家として独り立ちしたのである。

3. 概観

ウィラ・キャザーは、アメリカ文学史上地方色作家 (Regionalist) に分類されるが、その理由の一つは、彼女の描写力にあると言ってよい。批評家のアラン・アンゴフ (Alan Angoff) は、キャザーを地方主義作家 (Sectionalist) と呼ぶべきことを提唱しているが、呼び名が何であれ、彼女の作品の特徴は、舞台となる土地の地勢や環境や文化を正確に再現していることである。実

際、キャザーの作品は、対象地域の歴史や民話、またその地域に住む人々や人々の習慣、話し振り、信仰などを出来る限り忠実に表現している。その意味では、丁度トーマス・ハーディ (Thomas Hardy, 1840-1928) の『テス』(Tess of the D'Urbervilles, 1891)の物語が、一九世紀後半のドーセットの町の労働者以外には当て嵌まらないように、キャザーの『おお、開拓者よ!』や『私のアントニア』は、ネブラスカの南東部ウエブスター郡に入植したチェコ人農夫たちの第二世代にしか当て嵌まらない。『ひばりの歌』(The Song of the Lark, 1915)では、作品の出だしの設定がコロラド州ムーンスターとなっており、『迷える夫人』(A Lost Lady, 1923)ではコロラド州スウィート・ウォーターに設定されているが、彼女の描写から読み取る限り、それらの町は明らかにキャザーの住んだレッド・クラウドがモデルである。チェコ系の名前は作品中ではスウェーデン系やドイツ系に変えられているが、それが小説上の技巧的工夫であるこ

とは言を俟たない。

キャザーは、短編集および評論集を除き、生涯に小説一二作品を発表しているが、処女作は一九一二年に出版された前述の『アレグザンダーの橋』である。三八歳の遅いデビューであった。この作品では主人公バートレイの動きに合わせて、舞台がボストン、ロンドン、ニューヨーク、カナダと目まぐるしく変わっているが、二作目から六作目までの作品がネブラスカを舞台に描かれており、「ネブラスカもの」と称されている。年代順にその五作品を列挙すると、『おお、開拓者よ!』(一九一三)、『ひばりの歌』(一九一五)、『私のアントニア』(一九一八)、『われらの仲間』(一九二二)、『迷える夫人』(一九二三)ということになるが、この「ネブラスカもの」の最後の小説『迷える夫人』の作品としての完成度は非常に高いと言われており、文体、技巧、抑制のきいた表現など高みを極めた感があるのである。この『迷える夫人』を最後に、キャザー作品は舞台をネブラスカ以外に求

め始める。一九二〇年代中葉のことである。キャザーが「ネブラスカもの」を書く契機となったのは、一九〇八年のサラ・オーン・ジュエットとの出会いにあったと言われている。出会いの当時、キャザーはまだマクルアー誌の編集者だったわけであるが、ジュエットは既に六〇歳を目前にした婦人で、作家としての地位を固めていた。そのジュエットが三五歳のキャザーに親しく語りかけたという。二人の交友は、ジュエットの死により僅か一年半弱で終わってしまうのだが、ジュエットはキャザーに宛てた最後の手紙で、自分の育った環境に自信を持つこと、ネブラスカもヴァージニアもそうそう多くの人が持っている題材ではないことを論じたという。キャザーを含めそれ以前のアメリカの作家たちは、題材の選択の余地が限定されているという意味で、一樣にアメリカの歴史の浅さを嘆いていた。例えば、ヘンリー・ジェームズ (Henry James, 1843-1916) は、芸術という花は土壌の深い場所にもみ咲くこと、文学を生み

出すためには膨大な歴史を必要とすることを述べており、ナサニエル・ホーソーン (Nathaniel Hawthorne, 1804-1864) は、ロマンズと詩、つた、地衣、においあらせいとうは、育つためには廃墟を必要とする、と『大理石の牧神』(The Marble Faun, 1860)の序章に書き込んでいる。結局ホーソーンは、一七世紀のピューリタン社会に作品の舞台を見出して『緋文字』(The Scarlet Letter, 1850)を完成させたのであるが、キャザーの場合、その舞台がネブラスカだったわけである。後になって彼女は、ネブラスカは材料のいっぱい詰まった宝庫だと述べたと言われているが、この意味からジュエットとの出会いは、キャザーにとってこの上ない幸運な出来事だったと言わなければならないだろう。

キャザーを考える場合、作品の舞台をネブラスカから他地域に求め始めた二〇年代中葉を一つの分岐点とするのが一般的である。彼女自身、一九二二年を指して世界が二つに分かれた年と言っているので、キャザーにとつてのクルーシャル・ペリオドだったことは間違いない。批評界では、二〇年代中葉以前をキャザーの文学活動の前期と見做し、雄々しく自然に立ち向かい、独立自尊、忍耐、苦闘を通して成功した開拓者を描き、「人生いかに生くべきか」を読者の前に提示したのがこの時期だったとしている。しかし、二〇年代中葉以降の後期になると、一九世紀的芸術至上主義を標榜したキャザーには当時の文学のありように対して不満が募り、また未曾有の好況の時代から大恐慌を迎えた時代の社会の動きに身震いし、過去へ過去へと題材を求めるようになって、後ろ向き姿勢をとるようになる。それでも彼女に対する世間一般の評価は高いまま推移した。このため、批評家たちのキャザーに対する評価は、二分される形となった。

概して言えば、一九二三年の『迷える夫人』がキャザーのピークで、以後衰えていったというのが通説のようだ。ワーナー・バートフ (Warner Berthoff)、グランヴィ

ル・ヒックス (Granville Hicks) 、更には評論界の大御所ライオネル・トリリング (Lionel Trilling) などがこの通説を作ったと考えられる。それに対して、『大司教に死は来たる』(Death Comes for the Bishop, 1927) と『岩の上の影』をキャザーの芸術的完成とみる E.K. ブラウン (E.K. Brown) や、『ルーシー・ゲイハート』(Lucy Gayheart, 1935) を至高と考えるマックスウェル・ゲイスマー (Maxwell Geismar) などがその対極に立っている。批評家の抛って立つ立場の違いが、評価を二分させているといつてよいであろう。私はと言えば、「ネブラスカもの」にも不満を感じる点はあるものの、前者の見方に軸足を置いて考えている。

4. ネブラスカ作品

所謂前期の「ネブラスカもの」と後期の作品を比較した場合、描写の生き生きとした力強さを感じさせるのは、圧倒的にネブ

ラスカの開拓農民を描いた前期作品だというのが一般的な見方である。キャザーはネブラスカの動植物について広範な知識を具有していた。そのため、大平原に生息する動物や植生についての描写は微に入り細を穿つ程に詳細であり、また自然の営み、例えば大平原の地平線のかなたに落ちてゆく夕日についての描写はどこまでも美しく、篠突く雨や雷の描写はどこまでも激しさを感じさせる。それに比べて、例えば後期の作品でアメリカ南西部のニュー・メキシコを舞台とした作品『大司教に死は来たる』は、ブラウンの言うように、キャザーの最高傑作であるとする批評家もあり、事実人氣を博した作品なのではあるが、文体、手法ともに「ネブラスカもの」よりも純粋度が落ちている、というランドール (John H. Randall III) の指摘は正しいように思われる。また、フランスよりもフランス的だと言われるカナダのケベック地方を描き、フランスからアメリカ女流文学賞を受けた『岩の上の影』は、発表以来長期間に亘つ

てベストセラーを記録したのであるが、物語的語りの力強さを失ってしまったている、とは多くの批評家が指摘するところである。更に言えば、キャザーの最後の作品となった『サファイアと奴隷娘』(Sapphira and the Slave, 1940) は、女主人公サファイアの奴隷娘ナンシーに対する迫害と、「地下鉄道」を使つてのナンシーのカナダへの逃亡を扱い、嘗て幼少時代に住んでいた南部を再検討する試みであったが、キャザーは九歳でヴァージニアを去つてネブラスカへ移住したのである。彼女がフィクションの中で南部を再構築し得る程に充分南部を知っていたかと言えば、答えは明らかにノーであろう。実際、この作品はドラマティックな盛り上がり欠け、風俗小説のようである。心を打つことがないように思われる。彼女は、自分の誕生地ヴァージニアについての記憶は殆どないと述べている。彼女が記憶しているのは、家族が中西部ネブラスカへ向けて出発しようとしていた時に、後に残してきた愛犬が汽車の駅に向かって猛烈

な勢いで走ってきたというシーンであり、これについては後年何度も繰り返し言及したという。つまり、キャザーにとつてヴァージニアでの生活は穏やかな夢だったのであり、ネブラスカでの生活は、彼女を夢から目覚めさせるものだったと言える。

レッド・クラウドでキャザーはいろいろな人たちと出会った。そして、その人々を作品の中に取り入れている。『私のアントニア』では、アニー・パヴェルカを主人公アントニアのモデルとして使い、『迷える夫人』では、サイラス・マーナー夫人をマリ안의モデルとして使った。アレグザンドラの父親シメルダ氏には、旧世界からやって来た多くの教養ある人々を混ぜ合わせて組み入れた。そしてシアの音楽の先生ヴァンシユ教授には、偶然に知り合ったシンデルマイサー教授をモデルとした。更にキャザーは、自分自身をもアレグザンドラの中に組み入れた。(キャザーは、アレグザンドラがそうであったように、彼女の兄弟たちよりも農業について熟知しており、

父親と農業について話し合えるのは兄弟よりも彼女の方であった。) また彼女は、『私のアントニア』の語り手であるジム・バートンの中にも、『ひばりの歌』の主人公シア・クロンバーグの中にも自分を組み入れ、更に言えば、『迷える夫人』の語り手ニールの中にもキャザーを見ることができ

る。キャザーが「ネブラスカもの」を書くことができたのは、彼女が一八〇〇年代後半のネブラスカの農村生活の複雑さを熟知していたからだといえる。キャザーによれば、八歳頃からティーンエイジャーの時代は、所謂根源的自我とでもいべき生命を生きているのであって、この時期が作家としての形成期であり、この時代に題材の殆どを集めてしまうという。前述の如く、彼女は九歳でネブラスカに移住してきた。ネブラスカを去ったのは二三歳だったので、彼女の言うことが正当であるならば、ネブラスカに精通していたというのも頷けるといえる。キャザーが後期に描いた作品の舞台に

ついでには、彼女はその土地について本で調べるか、二、三か月その地に赴いて滞在したのみだったと言われている。従って、『ネブラスカもの』と違って、後期の作品で扱った地域に対する思い入れがそれ程強く感じられないのは当然のことであろう。

キャザーは、芸術というものは単純であるべきだ、との考えを評論「家具を取り扱った小説」(『The novel Demeuble』1922)の中で主張している。心の動きや肉体的感覚を精細に描出したところで、効果を期待することはできないのであって、従って、分析、説明、状況描写等の表現を単純化し、物あるいは人にあるがままを物語らせるに留めるべきだ、との謂である。この原則は彼女の心を凌駕するようになり、彼女はこれを後期の作品に適用している。しかし、グランヴェイル・ヒックスが言うように、彼女が熟知した生活を描き出した『おお、開拓者よ!』や『私のアントニア』を越えて、より楽しく読める作品は後期にはついで現れなかった。後期の作品では、彼女は

5. 作中人物について

明らかに単調になっており、尾ひれの付いた小さなエピソードの連続を読まされている感を否めないものである。心そのものから逆り出る、そして土地と人々との深いつながりを感じさせるような描写が見られないということである。

ワナー・パートフは、『おお、開拓者よ!』『私のアントニア』そして『ひばりの歌』の前半は、強く読者に語りかけてくるものがあると言う。それは、これらの作品が彼女の作家生活の早い段階で書かれたものだからであり、自分の熟知した子供時代のプレイリーでの生活を扱っているからだと書いている。パートフは続けて、前期の作品に比べ後期の作品は、退屈で、先入観に捕われており、機転がきいておらず、生命観がない、とも述べている。また、嘗てネブラスカに住んだことのある批評家マイケル・ウィリアムズ (Michael Williams) は、彼女の本の中で私は再びそこに住んでいる、と書いている。

キャザーの描く作中人物については、批評家の間でもいろいろな意見が交錯しているが、ひとつ意見の一致をみている点は、キャザーの描く人物が平板で非現実的だということである。彼らはページ上で成長するが、相変わらずページ上に留まったまま、ページから抜け出して読者の心の中に飛び込んでくることがないということだ。何が欠けているかと言えば、深さ、換言すれば文学作品の要諦である人物の心理学的分析が欠けているのである。キャザーは実際に会った人たちをモデルとして作中人物を描いているが、表面的な特徴を示すだけに終わってしまった。

キャザーは、南部の貴族的伝統の中で育てられた。小学校へは行かず、父方と母方の二人の祖母から自宅で古典文学を与えられ、ギリシャ語およびラテン語も学んだらしい。この期間に文学作品に触れたことにより、彼女は多くの文学的財産を手に入れ

たと考えられる。後年、文学を目指すようになった彼女が私淑したのは、ヘンリー・ジェームズだった。ジェームズの言葉使いが彼女をジェームズに近づけたというのは頷けるところであるが、もしかしたら、ジェームズの非現実的な登場人物を好んだのかもしれない。事実、彼女は処女作『アレグザンダーの橋』について、ジェームズを手本にしたようなもの、と後年述べている。

キャザーの人物描写から分かることは、彼女は人間同士の付き合いの必要性を十分理解していなかったということだ。彼女の他人への思い入れは、親兄弟を越えてゆくことはなかった。ガイスマーによれば、人間関係の結果齎される悲劇的な結末は人生の必然であり、愛も恋も人をその必然的結末に導く罫であるとキャザーは考えていた。まさに悲観的な人生観であり、彼女が生涯独身を貫いたのも、その考えが根底にあったからに違いない。実際、キャザーの人生を振り返るとき、彼女に男性の影が殆どないのである。結果としてキャザーの描く人

物は平板となり、内省することがないので内的葛藤もない。欲情に駆られることもなければ、理性的にものを考えることもしない。フロイドやユングを識っている読者には、そのような人物描写は受け入れ難く、その為屈だという批評が起ることになる。

ほぼ同時代の女流作家キャサリン・ポーター（Catherine Anne Porter, 1890-1980）は、キャザーの描く人物には何か欠けているという疑問に対して、彼女は生活を背後に隠してしまっていると述べている。確かに、『おお、開拓者よ!』にしても『私のアントニア』にしても、作中人物があまりにも単純に描かれ過ぎているのである。キャザーと全く同じ時期に作家活動していたシャーウッド・アンダーソン（Sherwood Anderson, 1876-1941）の『オハイオ州ワインズバーグ』（Winesburg Ohio, 1919）やアメリカ人初のノーベル文学賞受賞作家シンクレア・ルイス（Sinclair Lewis, 1885-1951）の『バブitt』（Babbitt,

1922）は、その心理描写の巧みさで読者を惹き付けていた点を考慮すると、『おお、開拓者よ!』のエミールとマリーについて、キャザーはもつと深層心理を深く追求すべきであった。

マリーは、夫との間が壊れているとはいへ人妻であった。敬虔なカトリック教徒である人妻が年下の青年に恋したのであり、これは許されざる恋ということになる。一方エミールは、年上の人妻に恋した訳である。最終的には、二人でいるところをマリーの夫フランク・シャバタに見つかり二人とも撃ち殺されてしまう。この二人の恋の顛末は、作品の後半の殆どを費やして語られており、キャザーには珍しく打ち震える悲しみをもつて情感豊かに描写されていると評する批評家もいる。しかし、読者が本当に知りたいのは、二人の恋の行方もさることながら、そこに至るまでの間に二人それぞれが経験した苦悩や葛藤である。苦悩する過程や葛藤する内面の姿を知りたいのである。

『迷える夫人』についても同じことが言える。年上の美しいフォレスト夫人に対して、語り手のニールは淡い恋心を抱き、彼女を女神の如く感じさえする。しかし、ストーリーの展開とともに、やがて彼女が単なる一人の女でしかなかったことを知ると、彼の彼女に対する感情は憐みが変わり、やがては軽蔑さえ感じるようになる。読者としては、その際のニールの内的感情の動きを知りたいのである。キャザーはあまりにも観念に捉われ過ぎており、そのため、観念と感情との間に大きな懸隔が生じていると言えるのではあるまいか。

もう一点付け加えるならば、作者が作品の中に顔を出し過ぎるという問題点がある。キャザーの作品に対して否定的な立場をとる批評家たちは、恐らくその点を問題にしている。ウエイン・ブース（Wayne Booth）によれば、キャザーは示す（showing）よりも語る（telling）作家であるという。自分の描き出す人物が道徳的判断を下さなければならぬ場面に直面した時、その場面

の中にキャザーは自ら登場してしまうのである。そして、その場面で作中人物がどのような感じているかを説明して、自ら結論を導き出してしまい、読者はそれをどのように受け取るべきかを語ってしまうのである。キャザーはこの手法を繰り返し使っているのであるが、これはやはり一時代古い手法と言わざるを得ないだろう。そう言えば、ホーソーンも『緋文字』の中で再三この手法を使っており、ホーソーンの欠点の一つに挙げられているのである。小説の原則である「語るな、語らせる」を破っているからである。

因みに、一つの証左として、『迷える夫人』から任意の二ページを選んで二六〇語を抽出し、その中でキャザーが「べきだ」を表す“to be”および「〜と思われる」を表す“seem”を何回使っているかを調べてみた。すると、平均して七回であった。比較のため、“showing type”の作家と考えられるヘンリー・ジェームズの『鳩の翼』(The Wings of the Dove, 1902) から同じよ

うに任意の二ページを選んで二六〇語の中で調べてみると、彼の場合は四回であった。更にもう一人、キャサリン・アン・ポーターの『花開くユダの木』(Flowering Judas, 1930) で同条件で調べてみると、ヘンリー・ジェームズと同じく四回であった。この結果から、キャザーが作品の中に顔を出し過ぎるきらいがあることが分かり、本来登場人物が語るべきことを作者が代弁してしまうため、いきおい作中人物が平板になってしまうものと考えられるのだ。

6. 主題について

キャザーは生涯に亘って幾つもの名誉博士号や文学賞を与えられ、多くの読者を獲得した実績のある作家であるにも拘らず、残念ながら、現在、キャザー作品はアメリカ文学の一角を占めるメジャーな作品としては扱われていない。アメリカ文学史を解説する参考書を見ても、キャザーのために割かれるページ数は限られている。恐らく

その理由は、彼女のテーマにあるのではないかと思われる。キャザーは、その時々社会が直面する問題を俎上に載せて料理するタイプの作家ではなかった。古いものが新しいものに取って代わられる時代にあつて、「人生いかに生くべきか」を終始追求した作家だった。

この古いものが新しいものに置き換えられるという変化の兆しは、開拓者の時代に既に現出していた。旧世界から移民してきた開拓民が、命を懸けて夢と理想を追い求めながら、苦悩と葛藤の末に開拓を成就させていった時、何も賭けることをせず突然現れた一世代若い狡猾な人たちが、開拓者が成し得た果実だけを掠め取っていったのだ。『迷える夫人』に出てくるアイヴィ・ピーターズがまさにその新しいタイプの典型である。

このように、開拓者の時代に既に変化の兆候は表れてはいたのであるが、著しい変化の波が押し寄せたのは第一次大戦以後のことと考えてよいだろう。キャザーが一九

二二年を指して世界が二つに分かれた年と言っているように、一九二〇年代という時代は、古いアメリカと新しいアメリカとを截然と分けた分水嶺的な役割を果たした時代だった。第一次世界大戦後債権国となったアメリカを襲ったものは、産業主義、商業主義、機械への盲信、物質主義、拜金主義、精神に対する物質の優位、個性の埋没と画一化の横溢などであった。彼女はこれら総てのものを憎んだ。そしてあらゆるものを拒絶した。フロイドからストラヴィンスキーまで、マイクロフォンからラジオまで、ルーズヴェルトから国際連盟まで、あらゆるものを拒絶したのだ。彼女は遺書に、いかなる作品も作品集として編まれてはならないこと、そして聾啞者の為であっても作品を録音してはならないことを明記した。尤も後者については、アーチボルド・マクリーシュ (Archibald MacLeish) の働きかけによって書き直されたことである。彼女はまた、一九三一年にプリンストン大学から名誉博士号を贈られて謝意演説をす

る際に、マイクロフォンの前に立つのを拒否したと言われている。キャザーの科学や機械や産業に対する偏見は度を越していたと言わざるを得ないが、それらの時代の変化が人々の生活を実に底の浅いものにしていく、とキャザーは感じていたのである。従って時代に対する拒否反応が、必然的に彼女を過去へと向かわせたと解するべきであろう。そして、過去に対するノスタルジアの感情とともに人生の悲しみが彼女の中心に胚胎し、古き良き時代への回帰を望みさせたのであろう。彼女にとっては、過去の価値観のみが受け入れ可能な基準だったのである。

シンクレア・ルイスは、キャザーのこのような過去を讚美するやり方をアナクロニズムと決め付け、キャザーはそれに大いに反撥したらしい。ルイスはアメリカで最初にノーベル文学賞を受賞した作家であるが、キャザーと同じような経歴の持ち主である。つまり、キャザーがそうであったように、大学卒業後作家活動に入るまでかなりの期

間に亘ってジャーナリズムの世界に身を置いていたのである。その後作家に転身し、キャザーとは違ってジャーナリズムでの経験を生かし、写実的手法を用いて痛烈にアメリカ文化を批判し、社会問題に取り組んだ。そして『本町通り』(Main Street, 1920)、『パビット』、『アロースミス』の生涯』(Arrowsmith, 1925) 等々を書き、それらの作品が一九三〇年のノーベル文学賞受賞に繋がっていった。一方キャザーは、ジャーナリズムを離れて作家に転身した後、前述の如く「人生いかに生くべきか」の生死の問題をテーマに選んだのである。

キャザーの作品を通読すると、彼女は人生を上向きのカープを描く上昇期と、下向きのカーブを描く下降期に分けていることが分かる。上昇期は当然人生の前半に訪れ、夢を持ち希望を抱き理想に向かって邁進する時期である。ただ、生きることは苦難に耐えることであるという彼女の悲観的な人観の故に、どの作品の主人公も多くの試練を課され、その試練を勝ち抜いた者だけ

が成功者として描かれている。それは人間の生き方についての理想主義と言ってもよく、「ネブラスカもの」と呼ばれる作品がこの範疇に入ると考えてよい。ただここで一つ忘れてならないことは、キャザーはフロンティアの生活の過酷さを描き、それを通して人間は如何に強いのか、貧困や数々のトラブルにいかに対処するかを例証したのであるが、それは、換言すれば、キャザーの作品は適者生存であつて、強い者は賞讃され、弱い者は敗れ去るということである。キャザーは弱者に対して全く容赦がなかったのである。

キャザーが「ネブラスカもの」を離れ他地域に題材を求めて書き出した時、彼女は既に五〇歳を越えていた。即ち、彼女の後期の作品は、作家自身が下降期に入つてから書き出されたものであるから、悲観的な人生観は更に度を増して描かれることになる。彼女は人生の下降期を苦難の時期と捉えており、肉体的な衰えがその感を更に強める。幸福を感じる者があつても、幸福は

不幸への入口とさえキャザーは考えていた。衰弱し、明るい未来も想定できず、死に向かつて進んで行く下降期は、上昇期と比べれば、確かに不安な要素ばかりが目立つ時期である。しかし、それが人生の真実だと考える者は、キャザーの後期の作品を高く評価するだろうし、「ネブラスカもの」との落差に失望を感じる者は逆の反応を示すに違いない。キャザーに対する評価が二分されるのは、ここに理由がありそうである。

7. おわりに

アメリカの大学で米文学を教えている友人の話では、最近の学生の間で「キャザー離れ」が進んでいるという。卒業論文や修士論文のテーマにキャザーを選ぶ学生の数が減っているらしい。もしそれが本当だとすれば、当然何らかの理由がある筈である。私が考えるに、「キャザー離れ」を引き起こしている要因の一つは、キャザーの作品に共通するプロットの貧弱さにあるので

はあるまいか。『私のアントニア』が出版された後、この作品にはプロットがないとキャザーが嘆いたというのは有名な話であり、また、キャザーの作品を高く評価し彼女に好意的な批評をしたロバート・ラウレンも、キャザーには複雑なプロットを組み立てる能力はなかつたと述べている。

複雑なプロットの構成を不可能にしていたのは、人間関係の絆の重要性に対して否定的な見解を持っていたキャザーの偏狭さにあると考えられる。自分の家にキャザー専用の書齋を造つて住まわせてくれたイザベル・マクラング、文字通り生涯に亘つて生活をともしにくれたイーディス・ルイス (Edith Lewis)、惜しみなく文学上のアドバイスをしてくれたジュエットなど、キャザーを側面からサポートしてくれた人々のお蔭で彼女は作家活動に邁進できたのであり、その意味で個人レベルでの付き合いの重要性は認識していた筈である。しかし、人間の集団レベルになるとその意義を認識することができず、クモの巣のように張り

巡らされた人間関係の渦は、必ず悲劇的な産物を生み出すとキャザーは考えていた。従って、彼女の描く主人公はいつも孤独で、典型的で、単調で、平板であり、それがプロットの貧弱さに繋がっていったと思えるのだ。貧弱なプロットからはドラマチックな展開は期待できず、故に人を知的に刺激することもない。その点が敬遠される要因の一つなのではあるまいか。

もう一点はプロットとテーマの両方に関わってくるのだが、英雄的理想主義では現代人の心を捉えられなくなったということだ。「ネブラスカもの」に関して言えば、五作品の全てが「終わり良ければすべてよし」で幕を閉じている。アレグザンドラは四〇歳にしてカールと結婚をした。アントニーアは苦勞の末一〇人の子を持つ幸せな母親になった。シアは有名なシンガーとなつてフレッドと結婚した。ニールは弁護士として成功を納め、フォレスト夫人は裕福なイギリス人と再婚した。この主人公たちは、数々の試練を乗り越えて最終的に成

功を収めた一種の英雄である。しかし、現在の社会に英雄待望論はない。更に、嘗ての社会ではテーマとなり得た「耐えることは美德である」ということも、現代においては最早テーマとはなり得ないのである。

現在の社会の感情は、セーフティネットにも引つ掛からない弱者や貧者をどうすべきかの方向に向かつている。現代は、弱者や貧者に優しい社会の構築が命題なのであり、その意味ではアンチヒーローの時代と言つてよいかもされない。つまり、嘗てテーマになり得たことが、現代においてはなり得なくなつたことが、「キャザー離れ」のもう一つの要因かもしれない。

ただ最後に一言付け加えておかなければならないことは、「キャザー離れ」の現象が起きているからといって、それでキャザーの価値が減るものではない。現代小説の視点から、一世紀前の小説を「古い」というひとりで結論付けることは明らかに間違っている。キャザーは一世紀前の社会において価値のある作家であつた。嘗てテ

マとなり得たことが現代ではなり得ないとしても、価値のあつた作家は、現在でも「文学史上」価値があるのである。

参考文献

- Angoff, Alan, ed. *American Writing Today*. New York: Books for Library Press, 1957.
 Berthoff, Warner. *The Ferment of Realism*. New York: The Free Press, 1965.
 Hicks, Granville. *The Great Tradition*. Revised edition. New York: Biblio and Tannen, 1967.
 Lindemann, Marilee, ed. *The Cambridge Companion to Willa Cather*. Cambridge: Cambridge university Press, 2005.
 O'Brien, Sharon, ed. *New Essays on My Antonia*. Cambridge: Cambridge university Press, 1998.
 Porter, Katherine Anne. "Reflections on Willa Cather" in *The Days Before*. New York: Harcourt, 1952.
 Sergeant, Elizabeth Shepley. *Willa Cather: A Memoir*. Columbus: Ohio University Press, 1992.
 Williams, Michael. *Catholicism and the Modern Mind*. New York: Dial Press, 1928.